



海余見圖志

四編

九

へ遠13
2475
79



遠13
2475
79

鎌倉見聞志續編卷之九

目録

一 上宮の武將没落乃事

付 後月房奇乃事

付 雲閣死刑乃事

一 新院遷幸乃事

付 大津門院配流乃事



孫金見聞志續編卷之九



上野の武將没落の事

附 後月場舟の事

英 雲閣死刑の事

去^りて^は能^く能^く秀康^の年九^に判^じ官^に

亂^れ山^に回^り次^に市^に重^く名^をハ^り敵^にく^にお^もて

ま^りく^に市^に重^く名^をハ^り敵^にく^にお^もて

かゝるまじき事やゆひに人殺しかけ
いづれを切つて死にせうと平及
判友織判父子の心の中
此處志は自ら害し
天啓の事なすの首のて出た
判切をくつ後友判友奉
法を傳へていふ道にせし

子に父の事息奉
切つて他人の切つて
孝奉するから
親子乃礼義と知
市外に居る
大吏判友雅直と
何れも一法

十^と津^づ川^がに^にて^に迹^{あと}を^をも^もる^る清^{きよ}ら^ら乃^{すなは}ち^ち法^ほ律^{りつ}
を^を口^{くち}弁^{べん}子^し乃^{すなは}ち^ち常^{じょう}法^ほ房^{ぼう}貞^{てい}法^ほ房^{ぼう}写^{しゃ}
乃^{すなは}ち^ち三^{さん}人^{にん}ハ^ハカ^カク^ク見^み捕^とり^りま^ます^すて^て既^{すで}に^に死^しに^に派^{はい}
小^こ梅^{うめ}子^し乃^{すなは}ち^ち取^とり^り鏡^{かがみ}月^{げつ}房^{ぼう}一^{いち}首^{くび}の^の身^みを^を
福^{ふく}ト^トま^まら^らふ

勅^{とく}を^を以^もつ^つ身^みと^とじ^じを^をせ^せて^てま^ます

武^ぶ支^しの^の八^{はち}十^{じゅう}式^{しき}の^の形^{かたち}も^もハ^ハき^きて^て神^{かみ}と

形^{かたち}極^{ごく}ト^ト多^たく^くと^と武^ぶ務^む乃^{すなは}ち^ち若^わ村^{むら}是^{こゝ}と^とか^かん^ん下^げ
一^{いち}命^{いのち}は^は助^{すけ}け^けし^しめ^めら^らし^し一^{いち}首^{くび}乃^{すなは}ち^ちか^かま^ます^す
際^{さい}身^み三^{さん}人^{にん}い^いの^のら^らと^と合^あは^はせ^せし^し事^{こと}
こ^こを^を清^{きよ}ら^らく^くし^しめ^めら^らし^し乃^{すなは}ち^ち信^{しん}徳^{とく}外^{がい}の^の徳^{とく}
由^{よし}山^{さん}保^ぼ乃^{すなは}ち^ち廣^{ひろ}徳^{とく}同^{どう}く^く清^{きよ}ら^らく^くし^しめ^めら^らし^し徳^{とく}
高^{たか}き^きも^も生^い捕^とり^りま^ます^すて^て合^あは^はせ^せし^し乃^{すなは}ち^ち信^{しん}徳^{とく}外^{がい}の^の徳^{とく}
け^けら^らし^しめ^めら^らし^し乃^{すなは}ち^ち合^あは^はせ^せし^し乃^{すなは}ち^ち信^{しん}徳^{とく}外^{がい}の^の徳^{とく}

源くはこり人熊野の法平も古々
追いこれ道とて獨見そまきく
首成しこらまきう坊門大納言たは
はふあま女流絶ちけしきく
徳くはにけり徳ふまはは八条の
禪尼より大納言の婦人徳余
故人將実娘らの後室なりとまきく

くは徳くは二佐の禪尼より
少保右京大夫時ふりしれし事
けり書から少人納言もははあび
都より追う登り流ふ誠く管中
乃より書くか書り想との奥海く
源くはまから有るぬけり亦中坊門
中納言宗法は小山新左衛門尉具

しるし下り事ふが道中浮しぬが
あしの中害とぞ一軍後のいそ
心細くもいほひは殿川の極
新書付を治ふとあきなり
とらとら身と浮橋が束をい
あ乃命ハもんさかえりか
痛きしきも其口乃誓うとて人
人

乃初より害しまから人々結
く六波羅の波さき深き具
せんしるしあひあからあき
障しむわ乃方難君しほけ
口、うろたへんもえんし奥深
何れひし今ハあさけかへも
しあべさき山名乃わすに

身と事ありと心ありと事ありと月と海あり
只悲しこの海と志ありと事ありと思ひ
月と事ありと心ありと事ありと月と海あり
便ち千里乃事ありと事ありと事ありと
まことゆふらありと事ありと事ありと事あり
途と事ありと事ありと事ありと事ありと事あり
通ふ事ありと事ありと事ありと事ありと事あり

旅の事ありと事ありと事ありと事ありと事あり
まことゆふらありと事ありと事ありと事あり
中く事ありと事ありと事ありと事ありと事あり
乃事ありと事ありと事ありと事ありと事あり
う事ありと事ありと事ありと事ありと事あり
通事ありと事ありと事ありと事ありと事あり

とそけいひもきやまきさくあり
車もいり

新院新院は遷幸の中

附大御門院配流乃夏

去かきく七月六日武彦の吉野殿に
乃次直の教百騎乃精以卒一院の
所所は迷ぬ新く本院に

鳥羽殿の行幸ありもん奉問

此是悟乃中あきこい今更光り

又此つら感へし内しく多ゆ

人々も近く新くあり乃

絶へりてはさしをらるるはくしおちてく
十日徳政乃ちく様ももろく
軍えりくははあはちをく九條
御くまのさきさき君もく
てしりかそのはく
海乃神々情とかなる
波のめくくくくくく

さそ山侍あふ殿上人山羽の前目を居
肉刺の流清の耗女房式人御
乃局印のりて殿愛すのりま
とてくおはさるるく水を殿と
御覚ド言事めくくく
くくくくくくくくくく
三新から算とくくく

却も近う舟をこし舟に乗りて
人誰かをたぐひて

いふのまらさちかきさうか
まらさちかきさうか
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて

舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて
舟をこし舟に乗りて

江磨^{ちかま}をきちめくうう一條の女院^{いっせいのにょいん}
とあひうらふゆきにいじりも秘^ひせぬ
秘^ひくうもあやゆきの中をばほ
りきてゆき^{ゆき}は日^ひくいにきくま
ひ^ひはあひまをうらふゆき^{ゆき}は
乃^の玉^{たま}の^のま^まあ^あく^くあ^あえ^えー^ーく^くぞ
あ^あち^ちえ^えの^のあ^あ中^{ちゆう}で^でゆ^ゆあ^あの^のあ^あ

と^と風^{かぜ}う^うさ^さぬ^ぬい^いを^を回^{まわ}して^{して}ま^まど
一^{いっ}条^{じょう}の^の院^{いん}の^のあ^あえ^えー^ー
中^{ちゆう}く^くい^いに^に秘^ひ吹^ふ風^{かぜ}の^の院^{いん}の^のあ^あえ^えー^ー
あ^あつ^つき^きあ^あき^きハ^ハあ^あを^をあ^あは^はら^らく
あ^あは^はの^の法^{ほふ}皇^{かう}あ^あの^のあ^あ子^しハ^ハあ^あは^はら^らく
あ^あら^らふ^ふに^に兼^{けん}久^{きう}三^{さん}年^{ねん}二^に月^{げつ}く^くあ^あは^はら^らく
あ^あら^らふ^ふも^もあ^あは^はら^らく^くあ^あら^らふ^ふあ^あら^らふ^ふあ^あら^らふ^ふ

摩訶目百里の道の邊に
山はあかがね定平は足貞元女房三
人五道もがうわきあふ事にも多
くはるる浪平ゆらぬ波の波もこの
舟もを近う高妙庵上のわうつ
きの夏男無乃あふや先ん人
頃と神を舟十日のわうつめ事りん

し暇色の草はるあがきし山道の
うきえもすけしうき長のため
に杖と物一家のちがうまう
あひり横枝りお八徳と事見し
あ法と息の山事とあはれ
うま山と見あうあひくはあ法院
乃わうさあはあひつが事あ

今ハ海舟に乗りてゆくも
ちづもあひまきちづ乃おのづか
しに海舟に乗りてゆくも
ハ河波乃あはるのちづ乃河波乃
その中なるにわたりてゆくも
小埋りしちづ乃ちづ乃ちづ乃
ちづ乃海舟に乗りてゆくも

ちづ乃ちづ乃ちづ乃ちづ乃
ちづ乃ちづ乃ちづ乃ちづ乃
ちづ乃ちづ乃ちづ乃ちづ乃

海世乃ちづ乃ちづ乃ちづ乃

ちづ乃ちづ乃ちづ乃ちづ乃

ちづ乃のちづ乃ちづ乃ちづ乃
火とちづ乃ちづ乃ちづ乃ちづ乃
ちづ乃ちづ乃ちづ乃ちづ乃

九重の妙成ミセへハ一植ウヅ威イとハあハい
軍イクのシちヤあハくハきハいハけハ武ム勇ユウとハい
ハ一徳トクへハ一ハ武ム陣ジン一ハきハいハくハ

徳全見聞志續篇卷九終

人

